

悪の華

根来 濔子

(略) 住む人もない廃屋で、歳月のかび臭い匂いに満ちた、埃の積もった真黒な衣装箆筒を開けたとき、時折人は昔の瓶を見つけ出す。思い出が詰められているその中から、魂がよみがえってきて、生き生きと迸り出る。

(ボードレール『悪の華 香水の瓶』より
鈴木信太郎訳)

北国に生まれた。松尾芭蕉も足を運ばなかった陸奥(みちのく)の果てである。緑の季節は短く、裸木の、小枝の先まで降り積もった雪が、雪解けの春までそのままの白銀の衣を纏っている。現実を消し去ってしまう、のっぺらぼうの重く沈んだ雪の風景。閉じ込められた家のなかではじける薪ストーブの黄色い炎。

様々な絵本に囲まれていた幼児期だったが、私の心の奥底には、特に強く植えつけられた鮮明な原風景がある。アラビアンナイトの絵本、なかでも「アリババと40人の盗賊」である。単調な風景のなかで育った

私は、遙か彼方の黄金色に輝く沙漠の国に言いようのないあこがれを持っていた。雪と沙漠、二つの反するせめぎあいとその後の私の精神世界の志向を決定したと思っている。

アリババの召使、モルジアナが、主人の危機を救うため、胸に短剣を秘め、タンバリンを掲げて踊りながら盗賊の頭(かしら)に近づき、一気に刺殺するという絵本の場面は、モルジアナの凜とした美しさと、殺気をおびた踊りのポーズに胸を打たれた。挿絵の作者は誰だったのか、講談社の絵本だったのか、覚えていない。花柄のロングドレス、頭にターバンを巻いたイラム風の服装、物語の奇抜さ、それらの毒々しい色彩に惑わされ、世界をひろげてくれた。私の上に降り積もる雪は熱砂でドロドロに溶け、やがて跡形もなくなった。

晴れた日でも山の峰々には雲が流れていた

私の家は市の郊外にある内科の開業医であった。母は看護師であり、いわば、共稼ぎの家庭に育った。大正から昭和にかけての、地方の開業医は土曜、日曜もなぐ年中無休、過酷な労働に明け暮れていた。夜中に馬に乗って往診にでかけることもめずらしくはなかった

と聞いている。父は子供たちに、医者になることを強
いながった。仙台で勉強していたころ、日本海軍軍医
に誘われたこともあったと聞くが、郷里の貧しい医療
を思い、地域医療に専念する道を選んだのだという。

それが父にとって不本意だったかどうか、知る由もな
い。「井戸のなかの蛙であってはいけない」というのが
信念だったと思うのだが、二人の兄も姉も、自分たち
の意のままに故郷をでてしまい、後を継ぐ者のいない
わが家は、やがて遠縁の手にわたり、私達は故郷の家
を持たない身となり、「故郷は遠きにおいて思うもの
(室生犀星)」の心境を味わうことになってしまった。

母も多忙で、診察室の病人のあいだを駆け回ってい
たので、家事や育児は人任せだったと思う。更に両親
が高齢になってから生まれた5人兄妹の末っ子だった
ので、母にあまりかまってもらった記憶がない。しか
しもちろん、母なりに私を愛していたのだ。なんの躊
躇もなく母のもとを去った私だったが、晩年、78歳
で臨終のベッドに伏していたとき、母は最後の呼吸と
ともに、一筋の涙を流した。その涙は私に対する抗議
のように思えて、何かのおりに心を刺した。しかしそ
の涙は、生理現象によるものと知って、気持ちには解放
されたのだった。

母の代わりに小学校を卒業したばかりで、子守とし
て雇われた(当時は女中奉公といった)少女が私の育
児を担っていた。少女の名前は「とき」といった。私
だけではなく、姉も兄もそれぞれ子守の女の子がつい
ていて、わたし達兄妹は農家出身の少女に育てられた
のである。

『銀の匙』の作者、中勘助は産後の肥立ちの悪かつ
た母に代わって叔母に育てられたという。外に出ると
きは必ず叔母の背に負われ、5歳ぐらいまでは土の
上に立つことができないうような弱弱い子供だったと
書いている。さりげない幼児の思い出だが、叔母に対
する繊細な感情が随所にあふれている清らかな小説だ。
また、太宰治の紀行的な小説『津軽』には「たけ」
という女中が登場する。母親が病弱だったため、3歳
から8歳までの大事な幼少期を育ててくれた母のよう
な存在だったといっている。何十年ぶりかたけと対
面する場面の、さりげなく照れを含んだ心の動きに私
は疑似体験をする。「平和とはこんな気持ちをいうの
だろうか、そうなら私はこの時初めて心の平和を体験し
た」。太宰の「たけ」と私の「とき」が、イメージがだ
ぶって、『津軽』は私の好きな作品の一つである。

私達姉姉にとつても子守の少女たちが及ぼす影響力は大きかったと思う。ときは我が家を去つたあと、近隣の農家に嫁いだと聞いたが、成人してから再び会うことはなかった。

「15でねえやは嫁に行き、お里の便りも絶え果てた
(三木露風) 赤とんぼ」。

何かのいたずらをして両親に叱られたとき、ときは自分も正座をして私を隣に座らせ、両手をついて一緒に謝ってくれた。まだ12、3歳の未成年者だったと思うのに、彼女は私の保護者であり、姉のような存在だったのだ。私は彼女の背中に負ふわれてぼんやりと育つた。彼女のお気に入りの歌で、時折口ずさんでいた「明月赤城山」——男心に男が惚れてエーという歌詞の演歌があつた。私もその歌が気に入って、彼女に真似てよく歌つた。もちろん歌詞の意味などわからずに、中学生になるまで真似をして歌い、当時東京の大学に通っていた兄に叱られたものである。私のアイデンティティに「明月赤城山」があることも認めないわけにはいかない。

小学校は大きく蛇行する川のすぐそばにあつた。川の浅瀬を裸足で歩き回り、水の冷たさが染みるのが

心地よかつた。小学校時代、放課後の校庭で、かくれんぼや陣取り合戦で遊び惚け、夕闇が迫るまで家に帰らなかつた。外に出て、同年配の大勢の仲間と遊ぶことは、とてもたのしいことだと知つた。その様子があまりにも生き生きとして楽しそうだったので、両親は勉強をしないといふ強制できなかったと、後年、述懐している。言うなれば放任主義による、いわゆる「育育ち」だったのだ。私はほとんど勉強をせず、毎日戸外で遊び惚けていた。

父から学んだものとしては「小倉百人一首」を思い出す。夜明けの遅い冬の夜、父は得意になつて一句ずつ解釈をしてくれた。正月、我が家の娯楽は百人一首のカルタ遊びで、何時も勝つのは、母であつた。恋歌を詠つたのが多い百人一首を、小学生だった私に父はどのように説明してくれたのかよく覚えていない。しかし私も小学生にして百首を全部暗唱するほどの腕前で、高校時代のカルタ大会ではいつも優勝した。カルタに閉じ込められた烏帽子姿の公卿やきらびやかな袈裟の僧侶に交じつて、雅びな十二重を纏つた女性（によしう）は、物憂げな風情で口ずさむ。

「花の色は移りにけりな いたづらに わが身世にふる 眺めせしまに」(小野小町)

我が家の門のそばにサクラノボの大木があった。鈴なりの実はうんざりするほどで、近所の人たちが集まってきては木登りをして楽しんだ。

2、3軒先にアイスクャンディーを売っている駄菓子屋があった。広い土間に大きな冷凍庫があって、長い棒にくるまれている赤や黄色や緑色などの棒状のアイスクャンディーが並んでいた。ある時、友だちがサクラノボのお札だといってキャンディーをくれた。甘くて冷たくて、喉に染みた。それからの私はキャンディーが欲しくてたまらなくなつたが、両親はお腹を壊すというので買うことを許してくれなかつた。決められた3時のおやつ以外は何かを食べることを禁止されていたのでお小遣いも持たされず、不満の塊だった。自由に買って店さきで食べる友達がうらやましかつた。後年、大人になってから、キャンディー屋のおばさんが笑い話として話してくれた。私は時々店に現れては、買うことのできないキャンディーを眺めては、おばさんにキャンディー屋の子供にしてほしいと真剣なまなざしで頼み込んだことがあったという。長いことアイスクャンディーは私のあこがれのお菓子であった。

真黒に日焼けした特徴のない少女であった。

6年生。昭和20年、太平洋戦争の戦況はますます厳しく、日本の中心部から遠い東北地方といえども、悲壮感が漂いはじめ、校庭の半分は畑に開墾され、ジャガイモが植えられた。私たち児童も勉強どころではなく、鋤を持って働いた。敵機は現れなかったが、ラジオからは連日「海行かば」の歌が放送された。戦火に散った英霊の御霊が故郷に帰ってきたときに流れるその悲しいメロディーは子供心にも、日本はのつびきまらない状態にあるのだと知った。

クラスに転校生が入ってきたのは4月―満開の桜の季節であった。散り際が愛でられて桜は日本の国花であった。「うたちゃん」という女の子の転校生は。戦災を避け、東京から疎開してきたのだった。疎開者は日を追うごとにふえ、お寺なども解放され、学童疎開で親元を離れた子供たちが、集団で生活をしているところが多かつた。うたちゃんは、遠縁である畳屋の離れでお母さんと一緒に暮していた。勉強もよくできて、名前の通りきれいな声で歌を歌い、都会の匂いを満身に漂わせているような、背の高い、色白の少女であった。しかし、クラスの男の子たちは「やーい、よそ者のくせに、えばりやがつて」とか、「やーい、妾の子の

癖に」とか言つてはやし立て、仲間外れにしようとした。全く縁のない土地に越してきて、不自由な寂しい生活を余儀なくされていたのに、子供たちは優しくなかった。意地悪の気持ちの底に彼らの嫉妬があることを私は見抜いていた。私は家に招いて、当時唯一の娯楽であった蓄音機で姉の所有物だった高峰三枝子のレコードで「湖畔の宿」（山の寂しい湖に——）を聴いたり、未来について語りあつた。私は自分の未来がどういうものか、想像できなかったが、彼女は「妾の子だつて偉くなれるのよ」と言つて唇をかんだ。たまに見かける彼女のお母さんは、白地に藍色の着物姿で垢ぬけた美しい女の人であつたと思うが、美が深いほど闇も濃い。今では死語である「めかけ」というのは美しい人のことをいうのだと私は思つていた。

日本が負けて、親子は東北の冬を避けるように東京に帰つていった。一年にも満たない、短いお付き合いだったが、うちちゃん親子が汽車に乗つて去っていくのを畳屋のおばさんと一緒に駅まで見送りに行つた風景は忘れていない。ドラマチックな別れの光景、泣けば申し分なかったが、私は涙も出ず、無言だつた。私は繊細な情緒をもつていなかったのだろうか。プラツトホームは、霏がかかったようにはかなく、なんのわ

だかまりも残さず、うちちゃんは去つてしまった。やがて私も東京で学生生活を送るようになるのだが、その後、うちちゃんが東京の何処で、どのような暮らしをしているのか、知ることはできなかったし、知ろうともしなかった。二度と逢うこともない、つかの間の淡い想い出になつてしまった。

その犬は茶色で衰弱しきつていた。一匹の野良犬が我が家に紛れ込んできたのだ。足を患つてびっこを引いている。やせて貧相な雑種の中型犬だつた。頭を撫でると緩慢に尻尾をふる。私はなにかしら食べられそうなものを与えたと思う。その目がやさしく、かわいそうで、この犬を飼いたいと両親に頼み込んだ。食糧難は子供心にも知つている。両親は許してくれるはずがなかった。しかし、行き先のない迷い犬を放置することはできない。私は毎日、家の中にあるものをかき集めて、内緒で犬に与えた。「たろう」と名付けた。私の意志で、はじめて飼つた動物である。親の公認を得ていなかったので、物置小屋の隅に寝床らしきものをつくり、夜は「たろう」と一緒に夜更けまで小屋で寝たりした。困り果てている両親をしり目に、断固として「たろう」のそばから離れない私を持って余していた

と思う。

「たろう」の唯一の味方である私の誠意が通じたのだらう。それまでいじけていた「たろう」は、学校から帰る私を待ち構えていて、うれしそうにからみつく。

私と「たろう」は固い友情で結ばれ、戦時下、蜜月の日々を過ごした。

数か月後、学校から帰ると「たろう」がいない。名前を呼んで家の周りをさがしても何処にもいない。両親に聞いただと、我が家の畑を管理してくれている隣の農家に預けたという。その家は田畑が広く、米や野菜を作り、食料が豊富で、家族も皆犬好きで、かわいがってもらっているから安心するように、街は食料難で犬を飼っていると近所に申し訳ないのだといった。夏休みになったら「たろう」に会いに連れて行ってね、と念を押したら両親は快諾してくれた。私はなんの疑いも持たなかった。「たろう」は農家でたくさん食べてふとつて、かわいがってもらって幸せに暮らしているだろうと信じていた。

ところがそれから1、2か月ほどたったころ、近所の男の子が「お前の家の犬は、犬殺しにつれていかれたんだよ」といった。町の行政機関（保健所）が野良犬をつかまえて殺処分することを「犬殺し」といつて

いたのだ。両親は私に内緒で「犬殺し」の人たちに「たろう」を引き渡したのだ。わめきながら両親に問いただしたら、もちろん否定したが、疑惑はもくもくと膨れ上がった。「たろう」は殺されたのだ。間接的に私の両親が殺しに加担したのだ。あんなに澄んだ目をした優しい「たろう」が、もうどこにもいないと思うと、親に対する不信感で、どのように反抗したのか覚えていない。しゃくりあげる日が続いた。私が大事にしていたものはこうしてやすやすと失われた。私が人生で最初に愛したのは、犬だったかもしれない。私は今でも「名犬ラッシー」（エリック・ライト作）という童話を読むと涙が流れる。

「一億総玉碎」とか「討ちてし止まん」など、過激な標語が連日ラジオから放送され我々日本国民を煽った。「かくて神風は吹く」という映画を小学校の講堂でみた。800年も大昔の鎌倉時代、蒙古襲来による「元寇、弘安の役」の故事を、まるで昨日の出来事のように誇張して、（なんぞ恐れん我に鎌倉男子あり 唱歌）日本は神国だから、どんなに戦局が不利でも、最後は神風が吹いて、敵機や敵の軍艦を木端微塵になぎ倒すという戦意高揚の映画であった。

「賢沢は敵だ」という標語を「賢沢は素敵だ」などともじって憂さを晴らす大人もいた

しかし、学校で教えられたように、子供心にも日本の必勝を信じていた。「軍国少女」という言葉通り、まさしく私もそうであった。世界は一つの国家であるべきなのに、他国への侵略と防衛、破壊と再建、そして民族紛争。それは現代にも続く。

「身捨つるほどの祖国はありや」（寺山修司）。

昭和20年8月15日、正午に玉音放送があるとかで、天皇陛下のお言葉を直々に聞くのだと両親はラジオのまえに正座した。兄たちは学徒動員でそれぞれの任地に出向き、私だけが隣に座らせられた。雑音がひどかったし、何を話しているのか小学6年生の私にわかるわけもなく、退屈なだけだった。ひそひそ話をしている両親をしり目に、終わるのをまちかまえていて戸外に飛び出した。真夏の日光は昨日と変わらず、ぎらぎらと輝き、強い日差しが路面を白っぽくかげろうのように照らしていた。「国破れて山河あり」（杜甫）。翌日、学校から夏休み中にもかかわらず、突然全員登校の指示がでて私たちは校庭に並んだ。校長先生が壇上にたち「日本は負けた、ありえないことが起こった」

といつて突然、号泣した。いつも「必ず勝つから皆、がんばれ」という激励に慣れていたのでこれは大変なことが起きたということだけわかった。大人が、それも尊敬する校長先生が大声で泣く姿を初めて目の当たりにして私達もつられて、もらい泣きをした。先生と児童の泣き声が校庭にひびいた。戦争は終わった。

それからの波乱万丈の世相の変化。「鬼畜米英」はどこへいったのか。私達は多感な年代で、それまで培ってきたアイデンティティを覆され、占領下のアメリカによる6・3・3制の「学制改革」の渦の中に巻き込まれていくのである。価値観が全く変わってしまったことの不思議を受け入れ、教科書のそこかしこを否定して黒塗りにしていった。戦後の倦怠と退廃、「こんな女に誰がした」（星の流れに）と菊池章子は自暴自棄にうたう。私はもう自分が子供を卒業したことを自覚した。

私は13歳。

一面に乳白色の世界。天地も定かではない不透明な原野のなか、一筋の白い道を歩いていた。その道はどこに向かうのか。私はどこに行こうとしているのか。ただ、やんわりと身体を包む春の宵の生暖かさがじつと

りと周りに立ち込めている。

私についてひっそりと従う幽かな影は透明な光のように優しい。紛れもない私の分身だ。裸のままの、身にまとう盾を持たなかった頃の私だ。

しかし今、薄明の中をひとり歩き続ける私に纏わりつくこの生ぬるさはどうしたことだろう。ふりはらってもなお、得体のしれない感触は、奥へ、奥へと私を導き、私の身体を触発する。やがてはるか道の彼方、大輪の真っ赤な花の蕾が突然現れた。私の道を遮るように、蕾は何かのきっかけを待つかのように大きくゆらめいた。

ぼつてりとした肉厚の花弁は生臭い風に揺れると華やかにその蕾を開いた。その中から、深紅の花芯が現れた。熱をおびて、燃えるような中心から、血が一筋、流れた。また一筋、そして血はとめどなく流れ、私の腿を伝い、足を濡らしていった。花芯の喜びであり私の戸惑いであった。

13歳の春、初めて私に生理が訪れたのであった。1つの殻を脱皮して変身していく動物のように、花弁を一枚一枚かき分けたその奥から、銀のうろこを纏った異形の私が、ぬるぬると生まれてきたのであった。

そうして、新たに開花したためくるめく悪の華のなかへ、すっぼりとつつまれていった。

(2022年 3月)